

春期福音特別集会 (第2回)

一粒の麦

――ヨハネ伝第12章20～28節――

1975年3月22日

小池辰雄

栄光を受くべき時 天下一品 今日ここにおいて 天来の我 本当の一者 上からの迫り 祈り

【ヨハネ12・20～28】

20 礼拝せんとて祭に上りたる者の中に、ギリシヤ人数人ありしが、²¹ ガリラヤなるベツサイダのピリポに來り、請いて言う『君よ、われらイエスに謁えんことを願う』²² ピリポ往きてアンデレに告げ、アンデレとピリポと共に往きてイエスに告ぐ。²³ イエス答えて言い給う『人の子の栄光を受くべき時きたれり。²⁴ 誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。²⁵ 己が生命を愛する者は、これを失い、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし。²⁶ 人もし我に事えんとせば、我に従え、わが居る處に我に事うる者もまた居るべし。人もし我に事うることをせば、我が父これを貴び給わん。²⁷ 今わが心騒ぐ、我なにを言うべきか。父よ、この時より我を救い給え、されど我この為にこの時に到れり。²⁸ 父よ、御名の栄光をあらわし給え』爰に天より声いでて言う『われ既に栄光をあらわしたり、復さらに顕さん』

●栄光を受くべき時

12章から19章までが受難週間の記事です。いよいよ終りの方です。キリストはもうそのことを覚悟しているわけです。ヨハネ伝12章20節から。

²⁰ 礼拝せんとて祭に上りたる者の中に、ギリシヤ人数人ありしが、ギリシヤ人がこういうところに現れているのはもう、福音が異邦人に宣べ伝えられようとする序曲みたいなわけです。

²¹ ガリラヤなるベツサイダのピリポに來り、請いて言う『君よ、われらイエスに謁えんことを願う』

イエスに会いたいというギリシヤ人ですね。

²² ピリポ往きてアンデレに告げ、アンデレとピリポと共に往きてイエスに告



ぐ。

「ピリポ」とか「アンデレ」というのはみんなギリシア名です。

²³イエス答えて言い給う『人の子の栄光を受くべき時きたれり。十字架を経て復活するその事態が、

「人の子の栄光を受くべき時」

と言われる。キリストにとつては十字架を通らなければ、本当の栄光がないわけなんです。

²⁴誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、

もちろん、自分の十字架の死のことを意識しながら仰つていらつしやる。

唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。²⁵己が生命を愛する者は、これを失い、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし。²⁶人もし我に事えんとせば、我に従え、わが居る処に我に事うる者もまた居るべし。人もし我に事うることをせば、我が父これを貴び給はん。²⁷今わが心騒ぐ、我なにを言うべきか。父よ、この時より我を救い給え、されど我この為にこの時に到れり。²⁸父よ、御名の栄光をあらわし給え』

相手に言っているうちに、キリストの言は父の方に向かってしまう。

されど我この為にこの時に到れり。²⁸父よ、御名の栄光をあらわし給え』

なんとも非常に深刻なお言です。

「誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。」

そして、

「自分の生命を憎む者でなければ、永遠の生命は得られない」

と。こんな言は普通の論理の世界、普通の哲学倫理の世界にはないわけです。

「一粒の麦」という。「一粒の芥子種」というのがマタイ伝13章に出ているはずですが、また、

「芥子種一粒の信仰があるならば」

という言もあります。麦でも、芥子種でも何でもいいです。とにかく、一粒。「一」ということ。一者。どうも教会というのはすぐ群を考える。ところが、預言者もみな実は一者である。みな荒野において一人呼ばれる。複数ではない。単数です。神さまもひとりです。神々ではない。私はこの「一」ということを、ある意味において、聖書の宗教は「一」の宗教であると言つてもいいかと思うくらいです。

創世記18章でアブラハムが神さまと問答をするところがあります。²²節以下に、

「²³アブラハム近よりて言いけるは、なんじは義者をも悪者と共に滅ぼし給うや。」

ソドムの荒廃した不信の町。ソドムとゴモラという町はどうも死海の中に没落したらしいですが。



24 もし邑^{まち}の中に五十人の義者^{ただしきもの}もあるも汝^{まじ}なおその処を滅ぼしその中の五十人の義者のためにこれを恕^{ゆる}したまわさるや。

だんだんこの五十人をせつていきまして、

27 アブラハム応えて言いけるは、我は塵と灰なれども敢えて我主^{わがしゅ}に言上^もす。

28 もし五十人の義者^{ただしきもの}のうち五人欠けたらんに汝五人の欠けたるために邑^{まち}を尽く滅ぼしたもうや。エホバ言いたまいけるは我もし彼処に四十五人を看

ば滅ぼささるべし。

四十五人ではいかがでございましょうか。四十人でしたら、三十人でしたら、二十人でしたら、十人でしたらとだんだん言つて、

32 アブラハム言う請うわが主怒らずして今一度言わしめたまえ、もしかここに十人看えなば如何。エホバ言いたもう我十人のためにほろぼさじ。」(創世記 18・23～32)

十人義しい義人がいるならばこれは赦してやると。そこで終わつてますけれども、実はこの十人からもうひとつしぼって、五人、三人、一人と。一人まできてよろしいわけなんです。一人でもいたらば、神さまは赦します。それはちゃんと旧約に、他のところに出ている。エレミヤ記5章1節に、

「汝等エルサレムの邑^{まち}をめぐりて視かつ察^さりその街^{ちまた}を尋ねよ、汝等もし一人の公義^{ただしき}を行^{まこと}い真理を求むる者に逢わば、われ之(エルサレム)を赦すべし。」(エレミヤ5:1)

一人の義人また真理を求める者があるならば、エルサレムを赦す。エレミヤという預言者は本当に孤独の預言者でした。荒野の預言者。このエレミヤが自分一人となつても神さまはエルサレムを赦したもうという、彼は己の体験にまでそれを突き詰められたと思ひます。アブラハムの場合も、本当に一人の義人がいるならば、これを赦す。福音の世界はそうなんです。もうひとつ言つと、キリストの激しい言がある。

「二人もいなくなつても、この石ころからアブラハムの裔^{すえ}を起こす」

とまで言われた。神さまの世界は絶望を知らない世界です。

●天下一品

とにかく、この一者。私は時々申します、

「皆さんは一人びとりが天下一品である」

と。

「どうして、私みたいなものが天下一品でしょうか」

なんて思つてはいけませんよ。とにかく、天下に一品なんだ。いいかわるいか知らんけれども(笑)。それは半分冗談ですが、天下一品なんです。K君という顔は世界中さがしても、



一つしかない。どんなに似たようなものであっても頭の毛の数も違うでしょうし。とにかく、一人びとりは完全に特殊につくられている。一者というのはそういうように造られている。そういう一者であるということが本当の人格者ということなんです。本当の神のものということです。神さまは百人を十把一絡げに考えられない。善き羊飼いはあの羊のひとつひとつをちゃんと認識し得るそうですね。私なんか実に先生としては落第な先生です。どうもすぐ名前を忘れてしまうしね。

一人びとりの名を呼ぶ。イザヤ書40章にも、

「²⁶なんじら眼をあげて高きをみよ。たれかこれらのものを創造せしやをおも

え。主は数をしらべてその万象をひきいだし、おのおのの名を呼びたもう」(イ

ザヤ40・26)

という言葉がある。一人びとりの名を神さまは、その名を呼ぶときに、それがすぐ存在になる。一人びとりを本当にそのように顧みておられる。良き担任の先生は一人びとりを本当に顧みている。四十人、十把一絡げではない。私は校長ですから、千五百人を相手にして壇上からしゃべったりする。けれども、

「君たち、私は一人びとりに語っているんだから、自分一人に語られているつもりで聞いてくれ」

と、私は言うんです。

そういう、神と我との関係は、一対一の関係です。比較をゆるさない。比較を絶する世界です。人格関係というのは比較はいらん。AとBとCの関係は、AはBとCを比較してはいかん。「あれがどうだ、これがどうだ」と、それは人格関係ではない。それぞれ絶対的な関係なんです。BがCに対するのもAに対するのも。AがBに対するのもCに対するのも。CがA、Bに対するのも。それぞれみな絶対的關係で、他に比べることのない世界。これが本当の人格関係で、一対一の関係です。

「汝、わが顔の前に何ものをも神とすべからず」

という。汝にとつてはわが顔の前には、他の神々はあるけれども、無きに等しいという。一対一です。これがモーセの十戒の第一でしょうが。これは人格関係の神さまなんです。即ち、一対一の関係ということです。それが民族に対してでも、個人に対してでもそうです。ランケが言ったとおり、

「各時代は神に直結する」

と言っている。お父さんが偉いからといって、子どもがすぐ偉いわけにいかない。信仰の世界はみな非連続の連続という。

「アブラハムの裔であるということをお前たちは誇るな、そんな血筋を考えたってダメだ」

という。



「血肉によらず、人の願いによらず」
と言っているでしょ。

●今日ここにおいて

そういう一対一の関係で私たちはあります。そしてまた、

「今日ここにおいて」

という、そういう時間的にも場所的にもいつものつぴきならないんです。

「昨日こうであつたから今日もこうである」

ではない。常に「今ここにおいて」という、そういう関係を実存関係という。それを本当に火花を散らしているのが、永遠をつかんでいる世界なんです。内村先生が

「二日一生」

と言いましたが、極限的に言うならば、そのような一瞬一生であつても、いつぶつ倒れてもかまわない。私はとにかくこうやつて、皆さんと聞くも語るも同じこと、福音の場にあつてぶつ倒れたいんだ、本当は。そうすればもう本望と思っております。

そういう一対一の関係、今ここにおいてという世界。これが本当に過去をも救い上げ、また未来をも引き寄せるような現在、白熱的な現在です。ロングフェロー(1807～1882)の「サーム オブ ライフ」(人生の歌)という詩に、

「衷に心情あれ、上に神在せば―!」
うち こころ いま

とある。しかしながら、上なる神と内なる心とが今度は一つになって、「神通心」とならなければいけない。神に通ずる心。神通力じんつうりきというのがあるけれども。神通心じんつうしんということ。神は私たちにとつてはキリストですけれども。私たちの贖い主キリスト。神の具体的な出店です。そのキリストという出店と一緒にならないと、本当の魂の交わりができないわけです。なぜ、天界のキリストがイエスとなつて現れたもうたか。私たちを具体的にじかじかに救わんとして降つてくださつて、どん底に立ちたもうたこのキリストをぬぎにして、いずかに救いがあるか。

この担い、この抱いだきにありまして、こういう一対一。ですから、もう自分なんていうものはもはや問題でない。だから、

「人おのれの生命を憎まずば」

というけれども、

「さあ、できるかな」

なんて思つてはいかん。できるんです。己が生命を愛していたら、こんなものを愛していてどうなるんですか、相対的な自分なんていうしょうがない野郎を。そうしたらもうあと、滅びの方へ行くですよ。

「こんなものは」



と言って、吐き捨てるようなくあいにして、

「ありがとうございます。あなたにでつくわしたら、こんなものはもう惜しくはありません。あなたが本当にうれしい」

と。キリストの愛はこの生命よりも貴いんです。そうしたらば、

「いい加減な生命に代えて、永遠の生命を、霊生を与えるぞ」

と言うんです。もう初めの誕生日はいいよ、霊の誕生日、第二の誕生日こそ本当の誕生日ですからね。

そういうようなくあいにして、自分の生命を憎むことができる。敵を愛することができる。そうでなかったら、力はきません。上から力が来れば、必ずそうなりますよ。私は無教会時代にはどうもそれが無理だった。

「敵を愛せよと言ったって、困ってしまったな」

なんてね。敵を可愛がるのではないですよ、この「愛する」というのは。敵を担い上げるということなんです。敵を担い上げ救い上げてしまうということです。もうそれだから、天下無敵なんです。敵なんか意識することはなくなってしまふ。そういう世界なんです。もう何といますかね、この福音の世界は大変なものです。キリストの福音というものは重厚でもって、もの凄い力を持っている。これはエネルギーにしたら、そこのエネルギーと違う。原子力というけれども、キリストはまさに原始力だからね。ウルクラフト、原始の力。キリストという原始福音――

「原始福音」

なんていう語も手島さんが言い出したか、私が言い出したか。むしろ私のスローガンから手島さんは気がついたかもしれないくらいだ。まあ、天界で笑っているでしょうけれども――そういう原始の原始力、ウルクラフトはキリストという原始力です。これが来ますから。これは本当に力がある。そして、その力は祈りの世界で、凄いよな。本当に聖霊が来て祈ったら、皮膚ガンが消えてしまったという。私はああいう話を聞くと、もうたまらないですよ、正直。皆さん、本当に神にあつては不可能はないということを身をもってひとつ行きましょう。相対的判断はもう要らんということです。

「汝われによらずは何ごとをもなしあたわず」

と。ひっくり返すと、

「我によれば何でもできるぞ」

ということ。ヨハネ伝14章かどこかにある。

●天来の我

そうだったわけで、

「誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば」



という。麦が地に落ちたつて、私は自然科学のことはよく知らないけれども、太陽の光線がきて、地面が温かくなつて、ここに養分がある。そして、種が発芽するわけでしょ。この殻が破れるわけだ。殻が破れて、まず根がさす。それから芽が出る。根が出て、それから芽がふいて、これがまた地表を破つて進んでいく。「死ぬ」とはこの破れることです。自己突破です。自己突破するところの力は上からくる。力はキリストからきます。キリストの光が、キリストの生命がやつてまいりますと、この自己突破をする。そして、これが根が生えて、芽が出てくる。これはみんな今度は、天的な生命、新しい生命です。生まれたときの我という、生来の我というものがぶち破られて、天来の生命が、第二の生命が、霊生が動き出す。この霊生は死なないんです。

今日今晚ここにおいて、受けとつてくださいよ。私が語っているときに、意味を受けとつてはダメですよ。響きを全身をもつて受けとつていただかないと。私は響きを伝えているのでね、意味を伝えているのではないんですから。キリストの生命が、光が、愛が、渾然たるものが動きだす。これが即ち、

「地に落ちて死なずば」

ということなんです。喜んで死ぬんです、これは。これが生命がなくて、自分でもって頑張つて根を出そうなんてしたつて、ヒヨロヒヨロした根で、しまいには枯れてしまうよな。そんな根だの、そんな芽ではダメなんですよ。

若い人は、何か信仰の世界というと、他力本願というと、意気地がないように思うけれども、冗談言うなど。本当の意気地はこの他力本願からくる。これを受けとらなくては。本来はつながっているはずなのに、切れてしまっているから、もう一遍つなぎ直すというのが、「宗教」という字でしたね。

「結び返し」

というのが宗教なんだから。本当の結び返しをやると、相対的な我がくずれて、今度は絶対的な我、天来の我、天我というのが動き出す。

易者が私のことを、

「あなたは天という字に非常に関係がある」

と言つた。知らないまに私は天という字を使っているんだな。そんなことを言うからね、向こうは何も知らないんだ、私のことを。天だとか、南だとか。そういう天我、天下の天我となる。

だから、

「一粒の麦、地に落ちて死なずば」

というのがうれしい言葉となる。本当の大生命に、本当の天我に生きるということを、キリストはかく仰つてらっしゃる。キリストはもちろん、十字架の死のことをこの時言つてらっしゃるんですけれども。



唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし。」

キリストにおいては、これは特別な意味です、特別な内実です。これは贖罪ということですから、キリストの他にできないんだ。キリストは贖罪死をとげれば、地の果てまでも世の末までも人々を救い上げてしまう。もう驚くべき死です、キリストの死は。そして、キリストの復活の生命、聖霊の降臨というものは、もう五千人にパンを食わせるどころのさわぎではない。あんなものはお茶の子さいさいなんだ。だから、そのキリストの大生命からいうと、あんな奇跡があるかなんて思うけれども、それはあるんだよね。何だか知らんけれども本当に。私もその場に居あわせたかったな。

そういうイエス・キリストの大生命というものが贖罪を通して顕れてくるから、イエス・キリストのこの言葉は――「多くの果を結ぶべし」どころではない。この言葉以上の――

「私の死を通せば無限に果を結ぶ」

と。無限無数に果を結びたもう。まあ何という存在かね、イエスというひとは。この一者は即ち無量無限者なんだ。皆さん一人びとりがイエス・キリストのこの生命をいただければ、どんな働きをするかわからん。

「お前たちは私よりも大きな仕事をする」

と仰ったのは、

「お前たちを通して、私は大きな仕事をするぞ」

ということ。キリストにみんな顧みられている一者ですから、どうぞ、決して自分をケチに考えないでください。そんな卑下はいらんですから。クリスチャンというのはそれだけの大きな気持をもっている。女々しいんじゃないですよ。そういう貧弱な気持はやめていきましよう。

「どうも、私は生来、気が弱くて」

なんて。私くらい気の弱いやつはないんだ。私みたいな弱虫の泣き虫がこういうことになつてしまったんだから。私が本来、非常に霊的な男で、また気の強い男だったら、それはまあそうでしょうなんてなことになるけれども。そうでない一番ダメなやつがこうやって選ばれるんだから。ユダヤ人みたいな頑かたくなやつが選ばれて、そしてひっくり返されるんだから。パウロさんなんていうのは頑ごんげな権化ごんげみたいな人だった。それがキリストにひっくり返されて、あの通りです。だから、今のユダヤ人も、イスラエル人も、

「パウロだけは間違えた」

と言っているそうだけれども。パウロみたいな大先輩をみて、本当に「これだ」と言つてひっくり返つたら、イスラエルはキリスト・イスラエルになったら本当なんだけれどもさ。

●本当の一者

そういうことで、「一粒の麦」という言葉において私たちはそのような大きなエネルギー



を受けとりたい。そして、皆さんは、何かしらんけれども、存在が伝道になってくる。伝道せざるを得ない。無意識のうちに人を救ってしまう。

「いつ、救ったでしょうかね」

なんてキリストに言うくらいなことになる。

「いや、あそこであいつは救われたんだよ」

なんてキリストが仰るかもしれない。そういうようなくあいに。そうでなかったら、福音は伸びていかないですよ、その人の信仰それ自身も。どこへ行っても、もう行き詰まりを知らない人になるわけです。どんな状態におきましても。

「日は好日」

というけれども、雨でも風でも。雨の日は雨の日となり、風の日は風の日となり、嵐の日は嵐となり、自由自在となつて、それと即して動いていく。パウロさんがそうだったではないですか。

「弱き者には弱き者となり、ユダヤ人にはユダヤ人となり、いかにもしてこれを救わんがためである」

と。あれはコリント後書9章だったかね。大好きなところだ、僕は。あのパウロの自在さ、あれが本当の福音の姿です。絶対にこちらの姿が決まってる。自在にして相手を救いあげていく。それは水のごとし。方円にしたがつて、水は四角にもなり丸くもなりながら溢れていく。相手を威圧するのではない。静かにこれを包んでしまう。その中で溢れてしまう。こういうようなくあいにして、本当の一者というものはどんなに貴いか。もう数をたむ必要はひとつもない。そういう一者の集まりが本当のエクレシアなんです。そうでない、他を頼んでいるような、そんないわゆるデモクラシーは衆愚主義というんだ。衆愚主義的なものはダメなので、神の民の集まりは本当にお互いが生命に溢れると同時に、これがよそに向かつて展開していく。

●上からの迫り

今に日本に大リバイバルが起きるといふような示しがきているそう。天から金の雨が降ってきているという。一体、日本に大リバイバルを起こすのは誰ですか。あなた方ではないですか。あなた方が一者となつて、一粒の麦となつて展開していく。そして、多くの果を結ぶ。一つのが破れて、そしてそれが成長していくときに、どしどしと人を救っていく。あるいは、あるときは本当に死をとおして行きます。一番ものの凄い伝道はやはりその人が、キリストの十字架の死をおすごとくに、死をとおしていく伝道です。手島さんが天界にいけば、あとの群がいよいよ進んでいくではないですか。そういうような具合に。

「では、小池先生もはやく死ね」

なんて(笑)。



「お前たちがダメだから、死ねないよ」

なんて(笑)。これはまあ半分冗談ですけども。私は私の仕事があるから、まだちよつと死ぬわけにいかない。使命があるかぎりには、神さまは置いておく。手島さんは、使命がもう終わつたような人だ、ある意味においてね。人が百年かかってもやれないことをやってしまったから。私はのろいから百年くらいかかるかもしれない。

とにかくそれぞれ、神さまは使命をもつて期待していらっしゃるから。それはいかにもして福音の証し人、証人ということ。この一者は証人です。そういうキリストがかかつている一者というものは、全部これは本当の強さを持っている。

「われ弱きときに強し」

とパウロが言った。徹底的に弱くなってください、自己に。そうしたら、徹底的にこれがぎつきの一極絶対ということなんです。いわゆる強弱ではない。だから、「弱き」ではなくて、無力となるといい。無力者となると無能力が出てきますから。私はこの無の消息がうれしくてしょうがない。何も力まないでいいから…(異言)…。上から来てしまうからね。もう面倒くさいから、異言でしゃべろうかな(笑)。いや、しゃべるのが本当に面倒くさくなる、上から迫ってくると。だから、絶言絶慮ということになる。全存在がもう言葉で、黙っていて、あなた方は

「ああ、そうです、そうです」

と。何も言わないで、集会はおしまいなんていうことになる。気合があるね。そういうのが本当の集会というんです。

そういう、どうぞ、この「一者」ということを忘れないでください。一人ひとりが本当に掛け替えのない天下一品の一者であるということなんです。キリストにあつては何を人というらやむか。うらやんだり、そねんだり、ねたんだり、そんなことはひとつもいらんです。もうそんな気持は起きなくなってしまう。

もう、「主さま!」と言つてね。それでいよいよ凄いことになる。そうしたら、光を発するから。終いに眩^{まはめ}くて見えなくなる。キリストが変貌の山で変貌したけれども、あなた方も変貌するよ、そのうちに。私みたいに70歳くらいになったらもう光つてしまつて、螢の光みたいに。こんな電灯なんかいらぬ。電灯なしで集会しようなんて(笑)。そういうことです、福音の世界というのね。そこらここらにあるのと違うんですよ、私たちのいただいているところの使徒たちの次元の信仰は。もう、無教会なんて言わないでくださいよ。ダメだよ、そんなのは。

「この使徒たちの、パウロ、ペテロ、ヨハネの次元に我々は行こう」

と、内村先生もなぜ叫ばなかったか。それは何といつても、聖霊が来てないから。これは本当に十字架を受けとってください。そうしたら、聖霊は来るから。もう自分がすつ飛ばされたら、上から臨んでくる。「主さま!」と呼べば、直ちにキリストは入ってください。



「もう、私はお前の魂の扉をたたいていないか。早く開け」と、ヨハネ黙示録3章にあるとおりです。

「そうしたら、お前とご馳走を食べるよ」

と。私たちのご馳走は何かという、キリストの生命ですよ。

「我をくらえ、我を飲め」

と言つてらっしゃるではないですか。これが最後の晩餐ではないですか。そういうような生命は…(異言)…。そういう生命の中に私たちは入れられる。もはや言うことなし。そして、どうぞ、人々にこの生命を伝えないでいられるかと。

「福音を伝えないでは、我は禍^{わざわ}いなるかな」

とパウロがいました。本当にそうです。「ざるを得ない」世界です。すべて「ざるを得ない」世界です。かくせざるを得ないという上からの迫り、それで動いていく。どんなことがあっても、絶対に行き詰まりません。おしまい。

● 祈り

私が祈りますから、あとは自由に祈ってください。

主さま、この伊豆高原の浮山荘を、今日は完全に私たちにお与えくださいまして、このような自由な恵みの時をおさずけくださり、東西南北からいろいろな事情を突破してやって来たところの兄弟姉妹たちと、この天国的な現実の中にあなたがとり入れてくださって、まことに感謝です。どうぞ、主さま、私たちの中に、あなたの生命が、あなたのみ光が、あなたの愛が私たちの中に入り、

「我なんじの中にあり……」

と、主さま、感謝いたします。もはや、十字架によって私たちはあなたに贖いとられ、贖いとられた私たちはただ平伏してあなたの中に入つてまいります。主さま、本当に感謝です。……いかにしても、この生命を、この喜びを人に伝えずにはいられません。……

一人びとりに最もふさわしく一人びとりを顧み、そして、恵みとまことをお与えくださり、御名を讃え奉ります。自分に破れて、あなたの生命が私たちの中にいよいよふつと沸きたち、そして、この生命をもつて、この真理をもつて、一人びとりに、困っている人、悩んでいる人、悲しんでいる人、行き詰まっている人、そういった人たちに力を与え、喜びを与えるその使者として、また証し人として一人びとりを十全にお使いくださること、を切に願ひ奉ります。日本の国は本当に大事な時を迎えておりますが、八方塞がりですが、しかし、天界は開けています。天界からのこのみ光とみ力により、どうぞ、この日本に新しき本当のリバイバルが進展また進展しつつあることを信じ、いよいよしかあらしめたまわんことを願ひ奉ります。今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれとともに御名により捧げ奉る。アーメン。

